

GNH—豊かさという概念を問い直す

2006年度～2008年度活動報告

大岩 圭之助

(1) 2008年度の報告

まず、共同研究3年目である2008年度の主な活動を以下に列挙する。

5月3日～5日に幕張で開かれた9条世界会議に出席、「環境と平和をつなぐ」というパネルのコーディネーターを務めた（大岩）。

そのパネルのパネリストであるエクアドル、コタカチ郡知事であるアウキ・ティトゥアニャ氏とその夫人で医師のアルカマリ氏をキャンパスに招き、懇談会やインタビューを行った。また、4月28日には戸塚の善了寺にて両氏の講演会を行った。

5月18日、来日ツアー中のアレイダ・ゲバラ氏（キューバ人医師、チェ・ゲバラの娘）と対談し、ラテンアメリカにおけるGNHについて意見をうかがった（大岩）。

5月23日、去年に続き、来日したアンニャ・ライト氏をキャンパスに招いて、講演をしていただいた。

6月8日、大分県中津市で開かれた作家松下竜一を偲ぶ「竜一忌」に参加、松下氏の文学と暮らしにおける「幸せなるピンボー」について、中村隆市氏と対談した。（大岩）

6月、来日したエクアドルのエコロジストであり、インタグ地方の熱帯雲霧林保護運動の指導者であるカルロス・ソリージャ氏をキャンパスと善了寺に招き、講演会や聞き書きを行った。（大岩、大木）

6月、昨年来行ってきたスローフード研究で知られる作家島村菜津氏と大岩（辻信一）の対話を、『そろそろ、スローフード——いま、何を食べるのか』（ゆっくりノートブックシリーズ第1巻、大月書店）という単行本として刊行した。

また9月には、今年3月に行った発明家藤村靖之氏への大岩（辻信一）のインタビューをもとに、同シリーズ第2巻、『テクテクノロジー革命——非電化とスロービジネスが未来をひらく』が刊行された。

7月、一昨年来、本共同研究が中心となって進めてきた講演会やインタビューをまとめて、『GNH——もうひとつの＜豊かさ＞へ、10人の提案』（辻信一編著）を大月書店から刊行した。（大岩、大木）

7月26日から8月4日まで、ブータンに視察旅行を行い、民主制移行後の状況を視察、施行されたばかりの新憲法について取材、資料収集を行った。(大岩)

8月11日から13日まで、山形県の出羽三山のうち、月山と羽黒山にゆき、修験道の調査を行った。(大木)

9月6日から21日まで、校外実習のため、インドのラダック地方を中心にゼミの校外実習を行いながら、「GNH」「持続可能な発展」「ほんとうの豊かさ」などのテーマについて現地の人々へのインタビュー、聞き取り調査を行った。(大岩)

9月23日、静岡県伊豆市市山の「天城子どもネットワーク」の主催者、田所氏を訪ね、子供のネットワークを通じたコミュニティ作りにかんするインタビューを行った。(大木)

世界仏教会会議での基調講演のために来日した、ラダック研究者でそのGNH論や環境思想で知られるヘレナ・ノーバグ＝ホッジ氏を講師として招く。また、数日にわたるインタビューを行った。それをまとめて、2009年6月にゆっくりノートブックシリーズ(大月書店)の第5巻として刊行の予定。タイトルは『いよいよ、ローカルの時代』

12月19日、昨年来共同研究の講師としてキャンパスに招いて講演をお願いしてきた政治学者ダグラス・ラミス氏へのインタビューをまとめて、ゆっくりノートブックシリーズ(大月書店)の第3巻として刊行。タイトルは『エコとピースの交差点』。

そのほか、10月～12月には、以下の方々を講師として研究会を行った。日本を拠点にラダック地方との交流をすすめるNGO「ジュレー・ラダック」の代表スカルマ・ギェルメット氏。代替医療研究家の上野圭一氏。不知火海の漁師で思想家の緒方正人氏。カナダの医師で、『Zen in Action』などの著者であるヨシ・タグチ氏。

2009年2月から3月にかけて、ブータンへの視察・調査を行った。(大岩、大木)

2008年度の主なフィールド調査は以下のとおり。

8月10-12日

・浦河(浦河べてるの家):大岩

11月9日

・静岡(自閉症児のケアに関するフィールド調査):大木

2月19日-3月12日

・ブータン:大岩

3月1-12日

・ブータン:大木

(2) 本研究の成果—出版物（単行本のみ）

1. 辻信一『カルチャー・クリエイティブ——新しい世界をつくる 52 人』（2007 年、木楽舎）
2. 辻信一、大木昌、他『GNH—もうひとつの「豊かさ」へ、10 人の提案』（2008 年、大月書店）
3. 辻信一『幸せって、なんだっけ—「豊かさ」という幻想を超えて（2008 年、ソフトバンク新書）
4. 島村菜津、辻信一『そろそろスローフード—今、何をどう食べるのか』（2008 年、大月書店）
5. 藤村靖之、辻信一『テクテクノロジー革命—非電化とスロービジネスが未来をひらく』（2008 年、大月書店）
6. ダグラス・ラミス、辻信一『エコとピースの交差点—ラミス先生のわくわく平和学』（2008 年、大月書店）
7. 向谷地生良、辻信一『ゆるゆるスローなべてるの家—ぬけます、おります、なまけます』（2009 年、大月書店）
8. ヘレナ・ノーバグ・ホッジ、辻信一『いよいよ、ローカルの時代—ヘレナさんの「幸せの経済学」』（2009 年、大月書店）

(3) 共同研究の 3 年間を振り返って

共同研究「GNH」のメンバーであった大岩研究員と大木研究員の対談を通じて、本研究を振り返り、その意義を再確認したい。

まず前半では、3 年間の多岐にわたる活動を見てゆく。まず、各自別々に行った活動や研究の成果を報告する。我々の研究を大学や大学院の授業に還元していく試みについても触れたい。共同で行ったフィールド調査として北海道浦河の「べてるの家」と、ブータンについて、そこから各自学んだことをつき合わせる。

後半はその全体を通して、GNH というテーマについてもう一度吟味してみる。特にこの GNH という言葉にそれぞれがどういう思いを抱いてこの研究に入ったのかという背景、また、その後それをどのように深めてきたか、今後どのようにこのテーマと関わっていくのか、を考える。GNH について考えることは同時に、「豊かさ」と「幸せ」というふたつの概念に取り組むことを意味する。また「豊かさ」の再考は経済学とは何か、文明とは何か、文化とは何か、という基本的な問いへと遡及する。これらの問いと自分なりにどのように取り組んできたかを振り返りながら、議論を深める。

この対談をもって、共同研究「GNH」の 3 年間の報告としたい。

第 1 部：3 年間の研究活動を振り返って

大岩：3 年間に行ったことを、すでにこれまでの中間報告でかなり詳しくまとめたわけですが、あらためて振り返ってみたいと思います。

大木：こうしてフィールド調査記録を見ていると、ずいぶんいろんなことをやってきたと思いますが、そのなかにも共通していることがはっきりあります。「愛知たいようの杜」は老人ホームと子ども施設の一緒になったところ。「行徳ケアハウス」は老人ホームです。栃木県小山市は系統が少しちがいますが、コミュニティがしっかりしているとどういふふうになんかの生活が変わるか、ということを見に行きました。西表島の調査はこれもコミュニティと人間の幸せの関係を考え

るきっかけになりました。あとは、何年も続けている活動で「森林療法研究会・静岡（モリスト）」があり、これは自閉症の子どもたちのケアを森林の中で行うものです。それから「モリスト」の全国大会を企画したり、参加したり。それから、知的・精神障がい児をケアする地元
の NPO に関わったことなどです。まとめるとぼくが考えてきたのは、社会の周辺にいる人たちの幸せはどうなのかな、ということでした。

GNH に関わったのも、そういう社会の周辺に追いやられた人との関わりが背景にあります。つまり、中心部にいる人よりはむしろ、痴ほうや障がいをもった人とか、知的・身体的障がいをもった人たち、あるいは過疎で不便な生活を強いられている人たちと関わってきました。このような人たちは自分たちの幸せをどう考えているのか。たとえば老人ホームというとなんとなくみじめな感じがしますが、彼らは彼らなりに幸せを考えているわけです。またこの間、こころの病を負った何人かの人の相談にのってきました。彼らも社会の周辺に追いやられて、就職もできない、家庭にもいることができない人たちです。

大岩：ちょうどこの頃、『関係性喪失の時代』という本を出されましたが、前後関係はどうなりますか。

大木：出版は 2005 年で GNH 研究会開始の前年です。なぜ日本にはこんなに不幸な人が多いのだろう、という疑問を持っていました。今までこの大学でこころの病を負った学生がいるなんてまったく知りませんでした。たまたまぼくのゼミの学生が重いうつ病で自殺未遂をくり返したり、カミソリで切った自傷行為の跡が手首から肩まで続いている子がいることが分かりました。その問題に注意を払いはじめたら、このような人たちが学校の中だけではなく、外にもかなりの人数がいることが分かってきました。こんなに豊かなのになぜこんなにうつ病に悩む人たちがいるのだろうか、そしてその延長として、なぜこんなに自殺者が多いのだろうかという疑問が 2003 年くらいからずっとあって、それが 2005 年の本の出版につながります。どうも豊かさ
と幸せはあまり関係ないのかな、と。

大岩：その流れの中で周縁の、マージナルな人々の幸せが気になったわけですね。1 年目の報告はここにあるわけですが、2 年目、3 年目の研究へとどうつながっていくのでしょうか。

大木：ずっと継続しているのは「モリスト」です。もとは「森林療法研究会・静岡」で、今はモリストという名前にかわっています。

大岩：具体的にはこの 2 年間にどんなことが？

大木：自閉症の子どもたちの態度がはっきりと変わってきました。医者は自閉症は生まれつきの脳障がいだから治らないと言っていますが、明らかに改善されています。それまではコミュニケーションが全くできなかった子が、子ども同士、あるいは子どもと大人でコミュニケーションができるようになっていく。少なくとも医者に行っているだけよりはかなり改善されていると思います。これはケアに参加した人みんなが感じています。

もうひとつの大きな展開は、モリストは自閉症の子どもたちを対象にしたものですが、その自閉症児も、いずれは障がい児から障がい者になっていく。問題は、その大人になった人たちのケアをだれがするのかということです。今日本ではものすごく欠けています。負担はすべて各家庭に押し付けられています。今年の 4 月に大人の障がい者のケアを対象にする社団法人を

設立し、私は副理事長を務めています。正式に福祉施設としての活動をはじめました。それがこの中の大きな展開ですね。

もうひとつは関連して「静岡森林塾」という会社の設立に関わっています。これは自然の中で社員研修をやったり、子どもたちの自然教室をやったりと、自然を媒介にしたいろいろな事業を展開する会社です。そこで障がい者が木工品をつくるなどの事業をやっています。

大岩：大木さん自身の GNH 研究の観点から、また観察者としての視点からふりかえてみて、どの辺が一番おもしろいですか？

大木：コミュニティの問題とも関連するんですが、結局人間はひとりでは生きられない。人間にとって一番不安で恐ろしいことはなにかというと、孤独なのではないか。マージナルなところにいる人たちでも、自分のことをケアしてくれるだけかがいつもいるということの安心感はそのすぐ幸せにつながる。また、精神障がいをもつ本人たちは分からないわけですが、その家族のケアを国や社会はやってくれません。モリストの活動の大きな利点は、家族もみんなと一緒に自然の中で楽しみましようというものです。

大岩：家族の孤立感はそのすごいものですからね。

大木：24 時間頭から離れないわけですね。ぼくが一番衝撃を受けたのは精神障がいをもつ家族の「コーヒーをゆっくり飲む時間が欲しい」という言葉です。この人たちのケアを放置して、障がい児だけをどこかの施設に入れるというのは、問題解決にはならない。これが活動を通して得た大きな教訓です。そういう人たちとの人間関係のつながりを強めてゆかない限り、この問題はいい方向には向かわないだろうと思いました。もっと一般的に言うと、僕たちが暮らしてゆくためには、助け合うコミュニティが必要だ、という問題だと思うんです。

大岩：なるほど。これは同時に森林療法であって、人間同士切り離されても生きられない人間は同時に、自然界と切り離されることによって、大きな不幸を抱えてしまった。そこが我々の着眼点だったわけです。その点でもこれはフィールドとしてもおもしろい場所だったといえますね。森林療法研究会で自閉症の子どもでもいいですし、そのご家族でもいいんですが、どんなおもしろい例がありますか。

大木：たくさんありますが、一番端的な例は夏に行く川遊びのプログラムです。普段子どもたちは自然の川の中で遊ばせてもらうことはないんですね。本来子どもはものすごく水が好きです。安全なところで、子どもたちが流されないようにガードして、水の中で遊ばせておくと、一言もしゃべれない子も含めて本当に生き生きと川の中で何時間でも遊んでいます。あのときに、外から見ていてもいろんな問題が解放されているんだと感じました。

大岩：ご家族はどうでしたか。

大木：ご家族の方たちは自分の手から離れて、子どもたちが安心して遊んでいるところを見ることによって、ものすごい開放感をおぼえます。大げさに言うと生きる勇気ですね。この苦労は自分たちひとりで背負っているのではない、という実感です。家族は「コーヒーをゆっくり飲む時間が欲しい」というほど追い込まれている。しかし自分の子どもが一日中安全なところで遊んでいる姿を、家族はちょっと離れて見ているという形をとるんですね。

大岩：前から気功、特に樹林気功をされていますが、森林療法という場合、それも関わりがあるんで

すか。

大木：今の森林療法では気功を正面からは取り入れていません。森林という場がすでに気功の場なんです。私たちが森に入ったとたんに森のもっているあらゆる気を取り入れている。それが森林療法のいいところです。だからとりたてて気功をやらなくてもいい。場がもっている力を利用するのが、そもそもの森林療法の基本です。これを科学的に分析している人たちもいますが、我々は基本的にはデータはとらない。見ているのはあくまでも子どもたちの顔であり態度であり、親たちの態度であるというスタンスです。

大岩：さてぼくの方ですが、この研究会を始める前にブータンに行き始めて、その後研究会として行ったのも含めて、合計5回ブータンへ通ってきました。それがひとつ活動の流れとしてはずっとあります。その間にブータンが大きな変化を遂げました。王制から民主制への転換がちょうどこの3年間に起こり、新しい憲法が生まれて、その中にGNHという言葉が書き込まれました。ブータンの歴史の中で画期的な時期と言うことができます。このことについて実際に出かけて行って、関係者に聞き書きをとるということをやってきました。同時にGNHをキーワードにして、その網にかかってくる人を国の内外から研究会として大学にかなりの数をおよびしたり、こちらから会いにいったりしました。それぞれの分野からGNHをキーワードにして主に「豊かさを問直す」ということで現在の経済システムの批判をそれぞれの分野からしていただくというのが主な活動だったと思います。

もうひとつこの研究会でおもしろかったのは、ちょうどぼくが指導教官だった大学院生の小田義紀君が修士論文を書くにあたってブータンに短い期間滞在しました。論文はブータンの民族誌というわけではないんですが、ブータンで短いフィールドトリップをやらしてもらったわけです。ブリという奥地の村に電気が入る前にぼくが行って、小田君は電気が入った直後に行ったわけですが、そこでいったい何が起きているのかということ、素材として書いた。なかなかいい論文ができました。これは研究会のひとつの成果です。

一方で、ぼくが関わっているNGOなどのいろんな環境、社会運動の場面でこのGNHというコンセプトを活用してみました。豊かさの見直しを迫り、現代社会のあり方を批判し、変革していくためのGNHキャンペーンを展開しました。ある程度の社会的なインパクトも持ちえたと思っています。

大木：電気が入る前と後のブリ村で具体的に変わったことはありましたか。

大岩：大きな転換を予想することもできたわけだけど、実際にはかなりなだらかで、庶民は一挙に変化をつくりだすことなく、ある種歯止めをきかせているという感じ。逆に、そういう知恵みたいなものも感じました。しかし他方では、結局はこのままどんどん明るい方向に、闇をどんどん消していく方向に不可逆的に進んでいくかな、という危惧もあります。しかし、それにしてもこの微妙な歯止めの利き方がおもしろい。ある意味ではGNHを掲げるブータンの社会全体を象徴しているような気がします。長い目で見ればこれは開発の流れというところなんだけど、それにしてもGNHという言葉掲げたりして、人々はそれなりのペースを保とうとしているようにも見える。

大木：その場合、GNHというのはブータンの中にいる人よりも、ひょっとすると外の方が声高

に叫んでいる印象があるのだけど。例えば、ブリ村の人たちは自分たちの社会が GNH 発祥の地だという意識はあるんでしょうかね。

大岩：話がブータンのことになったので、ここからはふたりに行ったブータンへの視察の話をすることにしましょう。ブータンにはもっと早く一緒に行きたかったのですが、いろいろな事情があって、一番最後に行くことになった。そのときにこのブリ村にも行ったわけです。

大木：今回行って、ものすごく極端なふたつの現象があると思いました。ひとつは我々のガイドがティンブに住んでいて彼によると、隣の部屋の人の顔も名前も知らない、という現象が都市部では起こっているということ。もうひとつは、携帯電話が田舎の農村にまで浸透していること。ああいう山がちなところですから、一番便利なコミュニケーションは衛星を媒介にした携帯電話なんですね。都市におけるコミュニケーションの断絶と、農村部における携帯電話を使用したコミュニケーションの高密度化。不思議な現象が起こっているというのが第一印象です。

これはあくまでも物理的な面で解決できる場所ですが、ではこころの中はどうなったのか。実は JICA の東京研修所の所長を務めている友人がいるんですが、彼は外国人がまだ入れなかった時代にブータンの調査に行っています。彼が言うには、客が村を去るときにはみんな歩いて送ってくれるのがブータンの最高のもてなしだ、と。大木さんはそれを経験したから本当にうらやましい、と。物理的には電気製品や携帯電話は入ったりするかもしれないけど、今のところ泣きながら歌をうたって追分まで送ってくれた彼らの気持ちというのは変わってなくて、そこが一番大事な点だと思います。そこはしっかり残っている。ただ、これは世代の問題で、次の世代はどうか、という不安は若干あります。しかし、今は確実にこころの中で彼らもっている「豊かさ」がある。外部の人をもてなし、去っていくのが悲しいというのが口先だけではなく感じたのが一番の感動ですね。

大岩：小田君の論文の話に戻りますが、夜がブリ村なんかでも淡白になってきているんです。電気がない頃はもっと濃密だった。濃密というのは単に闇が深いというのではなく、もっとわくわく感があった。それは夜ばいとかにも関係するんだけど、まずローソクの明かりがどの家からも漏れ出していた。そして、ほとんどどこの家でも、毎晩のように集まって、酒を酌み交わし、語り合い、歌い、踊っていた。それに比べると、今は青白い蛍光灯が光っているでしょ。あれで照らされた家の中はけっこう汚らしく見えるし、案外夜は早く寝ようになった気がする。家族の中でも、隣人同士でも、親密度が減ってきているような感じなんです。やっぱり電気というのは世の中に合理性をもたらすのかな、という気がします。そういう意味では、小田君がやった調査もなかなかおもしろかったんだな、と思いかえしています。

大木：ぼくもいろんなところに危惧を感じていて、ひとつは土壤の崩壊がすごいですね。聞いてみたらこれは、インドに売るためのじゃがいも栽培をやっているせいなんです。もともとブータンの人たちはせいぜい自分たちで食べるか、ローカルマーケットに出す程度の作物栽培をやっていたのが、今はかなり現金経済になっている。現金経済は、得た人と得ていない人の差が露骨に出てくる世界です。変化が起きているな、と思います。それも過剰に放牧と栽培を組み合わせさせてやっている。もう表土がはがれているんですね。写真を撮ってきましたが、あれは二度と耕地には復活できない。それだけその人たちは商品経済に巻き込まれている。

大岩：除草剤も広がりはじめています。自動車が通れる道がある場所には特に。シエムガン県にも広がっている。ショックだったのは、ぼくが2月に行ったペマガツェル県の一番奥の地域でも、実験的にやってみないか、と役人に言われて化学肥料やある種の農薬を使い始めた人がいると聞きました。お金がかかるので、お金持ちがちよっとやってみただけ、あまりたいした効き目もないから今はやっていないよ、と言っていました。あんな奥地にすら迫っているわけですね。

大木：ブータンに行って一番大きな収穫は、ブータンを理想化することの危険性に気がついたことです。実は、ブリ村の人たちが示してくれたような心の豊かさは日本にも40年前にはあった。ぼく自身も大学院の学生だったころ千葉の村にふらっと行って、そこの農家の家で子どもとして受け入れてもらってひと夏生活していたし、オーストラリアのアボリジニの人たちもそうだった。本当はどこにでもあったこと。それをブータンだからこそGNH程度が高いと考えると日本はそうでなくても仕方がないんだ、と考えてしまいがちです。これは危険な考え方です。日本もブータンも、どこの国でも人間の関係性の密度が高くて、お互い助け合って、もっとシンプルなところで満足を得られる社会でなければいけないと思いました。だからブータンを理想化しない方がいい。

大岩：理想化するような流れがあると、見ていますか。

大木：ブータンがGNH発祥の地ということと、ブータンの人たちのGNHが高いということを結びつけるのは危険だと思います。もしブータンの幸せ指数が高いとしたら、それは何なのかという本質的なところを考えないといけない。

大岩：ロマンティサイズする危険性はたしかにありますね。たとえば開発などの新しい動きに対して危惧をもつとして、その危惧のもち方が高みからものを見るものの見方で、すでにそういうものをつくってしまった社会の人間が、相手にだけは昔のままできてほしいというような視点に変わってしまう危険性がある。

大木：これはぼくのインドネシア研究のひとつの教訓でもあるんですが、オランダ人がインドネシアに来たときに彼らは相互扶助的な美しい共同体をみとります。彼らは自分たちが失ったものをそこにきて、ものすごく理想化した。同じことを我々がブータンに対してやってしまうかもしれない。彼らが抱えている本当の問題があるわけで、そういうところを見ないで理想化することの危険性を感じました。

大岩：それにも関連していると思うので、ぼくが韓国人の作家キム・ナミーと一緒に2月に行ってきたペマガツェルの村について話したいと思います。これはペマガツェルの奥の奥にあるチモンという村で、ブータンでぼくのガイドをしてくれるペマ・ギャルポの生まれ故郷なんです。普通に行くとき車で4日、歩いて2日のところなんです。実はそこから帰ってきてから、心の整理もノートも整理もできないまま、すぐにツアーが始まって、日本に帰ってきてこんなに時間がたつのにいまだにその期間のことだけが宙に浮いている感じなんです。あの経験をどういうふうに自分の中に落としこんでいけばいいのかがまだ分からないんです。ロマンティサイズしてはいけないぞ、という自分の中の歯止めもあるんだけど、それ以前に、とりつくしまがないというか。戸惑いのような感覚です。

場所は、三方をすごい崖に囲まれていて、もう一方が急激に落ちていく崖で、その一番下に大きな川が流れている。どこからも孤立している隠れ里のようなところです。そういう自然条件もあって、まさにタイプスリップして異次元に迷いこんだような感じ。でも、そこにすら携帯電話が入り込んできていて、その携帯の電源を充電するための太陽光発電が3つくらいあるんですが。

帰国してちょっとしてから、本橋成一さんの最近の作品である『バオバブの記憶』という映画を見た。セネガルの村についてのドキュメンタリーなんですけど、それを見てふと腑に落ちたというか、ブータンの奥地の村も思い出されたんですね。キーワードは「待つ」です。

ガイドであるペマはぼくを前世の兄弟だと考えていて、それを前もってふるさとの人に言うてあった。こういう人が行くから、と。彼と前世の兄弟であれば、村の人たちはみな、親戚縁者です。出迎えと見送りがいつ終わるともなくとにかく延々と続く。だからぼくがそこで過ごした時間の全部が、歓迎と歓送だったような気がします。まず、彼らは一日かけて山を超えて迎えにくる。そして山の頂上に着いたあとは、降りながら峠を通る度に、歓迎の儀式が開かれる。道端にごぎを敷き詰めて、花をかざって、卵とお米などのお供えものをして、お酒をふるまう。それを着くまで何回でも繰り返す。村に着いて、滞在中も基本的には歓迎会の延長。それが途中から歓送会にかわって、それをまた山の上までずっとやり続ける。泣いたり笑ったりしながら。そして歌があり、踊りがあり。酒は決して欠かせない。

歓迎の儀式では「待っていたよ」という。歓送の方では、「待っているよ、来年また必ず来てくれ」と言う。ぼくは「そうなのいいね」としか言えないわけです。こんな遠いところですから、また来年来れるとは思えない。でも彼らは待っているという。それは嘘ではないし、たしかに待っていてくれるとは思う。でも、ぼくが来ないからといって別に絶望するわけでもない。もし何らかの形でぼくがまた行くことができたときには、「待っていたよ」と心から言ってくれるでしょう。このことに、ぼくは文化がもっている力のようなものを感じたんです。「待つ」という力。

大木：ブリ村の人たちが後で残念がっていましたよね。あなた方がもっと早く着けば、村の外まで迎えに出て、あなた方を待って一緒に村に入ることができたのに、と。暗くなっちゃったから、あなた方は村の真ん中までバスや車で来てしまったのが残念だ、と。

大岩：そう、ずいぶん言われましたね。彼らにとっては、この「待つ」「迎える」「送る」というのがものすごく大事なプロセスなんですね。

大木：来客という出来事の最も重要な部分が、「迎えて送る」というところにあるというくらいの気持ちのいれようでしたね。最後に送ってくれるときに歌っている歌を聞いて涙が流れてきました。

「わたしをひとりにしないで
 あなたが行くと私は何を食べても味がしない
 どんな服を来ても暖かさを感じない
 何を見ても目に入ってこない」

そう、繰り返しながら歌って送ってくれました。あんな優しい気持ちは日本ではちょっとお目

にかかれないですね。

大岩：底が抜けているという感じです。特にあのチモンという村の人たちって、もし現代日本にそのまま現れたら、異常だと思われてもおかしくないくらいに、底抜けに、おだやかで、ほがらかで、優しい。

『バオバブの記憶』を見るとその中に「待つ」ということがテーマとして取り上げられている。考えてみるとドキュメンタリー映画をつくることも、人類学も、その主要な方法は待つことなんですね。フィクションでは待てない人たちが結末をつくってしまうんでしょ。同じドキュメンタリーでも、マイケル・ムーアなんかの手法は業界用語で「攻める」というんですけど、どんどん突っ込んでいってインタビューをとってくる。しかし本橋さんの方法論は「待つ」で、これをずっとやってきた。「待つ」方法で、「待つ」ということをテーマに撮ったのがあの『バオバブの記憶』という映画なのではないか、と思ったわけです。

この映画の主人公の少年は待っているんです。彼は学校に行きたくて、行けるようになる日を待っている。でもお父さんの仕事の手伝いをしなければならぬ。牛追いか、畑仕事とか、家族も多いのでいろんなことをしないとイケない。でもその少年はやっぱり学校に行く日を待っている。すぐ隣の家には、彼が行きたい公立学校の先生が住んでいる。その先生も彼が学校に来るのを待っている。時々「いつ来るの？」ときく。「仕事があって・・・」と少年は答える。先生は「うん、お父さんのお手伝いも大事よね。でも勉強も大事なのよ」と言う。そう言うんだけど、それ以上はせつつかない。こういう態度というのは、現代社会から見たらものすごく焦れたくて、消極的に見えるんです。なんでもっと積極的に前へ進み出て、未来を引き寄せないんだ、と。「待つ」ということは、現代社会においては非常に否定的に見られるんですね。後ろ向きだとか、消極的だとか言われて。ところが、プータンのチモン村にしても、映画のセネガルの村にしても、決して後ろを向いてばかりいるわけでもなければ、前を向いていないというわけでもない。ただ、そこにある種のバランス感覚がある。過去を振り払って未来へ突っ走るのではなく、未来をあきらめているわけでもない。未来と過去の間にあるバランスをとっている、というんでしょうか。「待つ」ということは元来そういうことで、逆にぼくたちはこれがとても不得意になっているのかもしれないな、と。

大木：さきほどの「また来てね」と言って、来年こなくても別に失望することはないという話ですが、これはなぜかという、彼らの生活はよその人が来ようがこまいが連続しているものがあるからです。客人が来てくれたらうれしいし、去っていけば悲しいし。そういう人の出入りがあったりなくても、とうとうと流れている生活があるのでびくともしない。そこが羨ましいと思います。ひるがえって我々の生活は確たる流れがなくて、そのときそのときで自分の人生が揺り動かされるような、そういう生活をしている。彼らはきっと昨日があって、今日があって、また明日がある連続性を無意識に感じているのかなと思います。

大岩：そうかといって変化がないわけではないんですね。ぼくらから見れば、今日も、明日も同じように見えるのに、その中にちゃんと彼らなりの展開がある。「待つ」という行為は求めるわけですね。求めるのだけど、未来の中にずかずかと土足で入っていかない。そういう歯止めがきいている。一方、ぼくらの場合は基本的に常に今には価値がなくて、常に今ではない明日、未

来というふうの前につんのめっている。バランスがとれているのは彼らの方ではないか、なんてことを思いました。

大木：彼らはなぜあんなに変化を受け入れつつ、生活の中で自分たちのスタイルをゆっくりと維持できるのかというと、その背景のひとつに宗教があるのではないかという気がしています。ブータンに滞在中、ある朝6時頃に起きて食堂に行ったら、ホテルのボーイが一回一回お経を唱えながらフォークやナイフを置いているのを目撃しました。その場面に偶然居合わせて思ったことは、彼らは人知れず敬虔な仏教徒としての行いをやっているんだな、ということです。我々のいのちは有限なものだけど、どこか無限なものに我々のいのちをひっかけることによって精神的な安定を得られる、というのが宗教の大きな意味だと思っています。その永遠なるものにひっきりりをもたない我々の世界というのはいつも不安定で、死が恐怖であり、病も恐怖。だけど彼らにとっては、来世は決してばかばかしい夢物語ではなくて、彼らの中のリアリティがきっとあるに違いないという気がします。

大岩：ブータンで印象的な風景はなんといってもおびたしい数の旗ですね。あれは「祈祷旗」で、それが風になびく度に、功德をつむって言われているけど、あんな無人の場所にかかっている旗がなびいて、いったい誰の功德になるんだろうと思ってしまう。でも、あれも自分を超え、人間の世界を超えた次元にひっかかるためのひとつの装置ですよ。

大木：この研究会の活動の一貫として四国のお遍路さんをしました。そのときに我々の生活の中にいかに祈りというものが失われてしまったかを感じました。しかし、お遍路さんに行くと、祈っている人はたくさんいるんです。ぼくは弘法大師の崇拝者なので、歩き始めてすぐに、彼が最初に住職になった観音寺というお寺に行きました。そこでかなり年配の方が夕焼けの中で、ゆっくり歩きながらものすごくいい声で浪々のご詠歌を歌いながら観音寺のまわりをまわっているのを目撃しました。あのときの感動は忘れられません。ぼくも最初のうち般若心経を声を出して唱えるのが気恥ずかしい気がしていたのだけど、途中から気恥ずかしさがなくなって、祈ることの素晴らしさを実感しました。

大岩：そう考えると、祈るということと、GNH、つまり幸せ度の関係は深そうですね。

大木：ブリ村の人たちも祭壇を持っていて、おそらく我々の見えないところでいろんなことをお祈りしているのだと思います。

大岩：ぼくたちが滞在してたとき、ブリ村の真ん中にある小さなお寺で、おじいちゃん、おばあちゃんたちが中心になって、朝から晩までお祈りしかしない3日間を過ごしていたのを覚えてますか。3日間、特別なものしか食べない、お祈りしか言わない。あれは年寄りが村のみんなの代表としてやっているようなところがあって、忙しい人たちは時々行って5分でもお祈りして出てくるんですね。

大木：祈りというのはそれで神様が聞き届けてくれて何かいいことがあるというのではなくて、もっともっと謙虚になることですよ。お遍路では、確かに願いごとと心願というのを書いて札を入れてくるのだけど、別にそれを叶えてほしいというのではないんです。やはりああいう絶対的な永遠なるものまに立って祈っているとき、すごく謙虚になって、自分が生きているのではなく、生かされているという感覚をもつ。謙虚さを取り戻すきっかけが祈りだと思っています。

ます。ぼくにとっては、お遍路さんの経験とブータンが重なった感じがしました。

大岩：では、次に「べてるの家」の話をしませんか。一度この研究会で一緒に北海道浦河にある精神障がい者のコミュニティである「べてるの家」に視察に行ったわけですが、いかがでしたか。

大木：本当にショックを受けました。まず、あそこでは患者という言葉ではなく、当事者という言葉をつかっていますね。べてるの家では大きな実験というか方法として、言語化することを重要視している。まず病名を自分でつける。そして当事者研究とは自分の状態を言語化することによって分裂している精神を統一させようという、これまでの精神医学にはない全く新しいアプローチですね。

大岩：統合失調の人たちの言語をまともに受け入れるというのは、ある意味タブーですよ。

大木：それは向谷地さんと精神科の河村先生の大きな功績、実験でもあるなと思いました。もうひとつは、彼らが生活者として浦河にいることの意味ですね。普通は精神障がいを持っている人を囲い込むんですね。知り合いで精神病院に務めている人は、患者のことを密かに羊と呼んでいると言っていました。まさに牧場のようなところで飼い殺しにする、そうすると国からお金が流れてくるんですね。ところが浦河にいる人たちは、いろいろな問題を起こしながらも生活者として生きている。それがなぜ可能かという、やはり人と人がつながっているから。人間にとって一番重要なことは関係性ということだと思うんですが、それは平たく言うと、つながっていることによって得られる安心感です。それがあから生きていける。べてるの誰かがおっしゃってましたが、自分が何かしでかしても一緒にあやまりに行ってくれる人がいる安心感。あのつながりがあるから患者としてではなく、生活者として生きていけるのではないのでしょうか。

それから、いろんな人格を持っている幻聴さんが今日は誰と誰が何人出てきていると言ったときに、人間の観念の世界の広さに衝撃を受けました。我々が考えている常識的な世界というのは、私がいて、あなたがいてとちゃんと境界があるんだけど、私の中に 20 人くらいの幻聴さんがいますとか、それぞれの声をみんなもっている。岩田さんという女性に「では誰々さんを出して」と言うと、途端に声が変わって、その人の口調になってぼくはその人と話をしている。ヨシコさんという人がいるというので、「そのヨシコさんを出して」と言うと、ぼくは岩田さんではなく、ヨシコさんと話をすることができる。ひとりの人間の中でああいうことができるというのは、本来我々の観念の世界は宇宙みたいにすごく広いのに、それを常識がせばめてしまっているのではないか、と思った。

ただ、つながりというときに、彼らはふたつの重要なことを落としていると思います。ひとつは自然とのつながりをあまり重要視していない。これは西洋医学のアプローチですが、人と人がつながるときに言語に頼りすぎているために、皮膚感覚や身体接触でのつながりを軽視している。ヨーロッパの医学がそうですが、医者と患者は物理的に距離を置いている。これは支配と従属の関係になって対等にはならない。なぜ身体接触を取り入れないのか、ということが疑問でした。たとえば「モリスト」の場合は、子どもが来ると抱きしめてあげる。そこからすべての活動が始まっていく。自然との関係、それから人間と人間の皮膚感覚を通じた関係がモリストのベースです。その点で、べてるの家の方法には若干不満がありますが、今言った3つ

の点は衝撃的でした。

大岩：もうすぐ『精神』というおもしろい映画が公開されます。これはニューヨークに拠点をもつ想田和弘さんという新進のドキュメンタリー作家の作品ですが、彼に戸塚まで来てもらってインタビューをしました。山本先生という岡山の老医師を中心にした「こらーる岡山」という精神障がい者のグループ—ぼくはコミュニティと考えますが—の話です。べてるの場合と色々な意味で非常にパラレルだと思いました。ぼくは向谷地さんを聞き書きした本を出しましたが、想田さんはそれを読んでくれて、彼も自分の映画とあまりに近いと衝撃を受けたそうです。

彼は昔、自分自身が頑張りやの東大生で、「東大新聞」の編集長をやっていたんだって。夜も昼も必死に仕事していて、ついに行き詰まって、精神科に駆け込んだ。そこで「燃え尽き症候群だ」と言われ、その診断書をもって、その足で編集室に駆け込んで診断書を見せながら、すべてやめる、と宣言する。そうやって昇り道から降りて、いっぺんにすべてがバラ色になったそうです。そういう経験があったからこそ、この映画にたどりついたと言っていました。おもしろいのは、想田さんの奥さんが映画の手伝いをしてインタビューなんかにつき合っているうちに「感染」しちゃって、山本先生に見てもらうことになった。想田さんがこれはおもしろいと診察室にカメラを持ちこんだら、奥さんはきれて「あなたのせいでこうなったのよ」と。その地続き感ですね。あの映画のすごいところは、我々と向こうの世界は全くとって地続きで、どこまでがこっちで、どこから先があっちかというはっきりとした区別なんかない。今おもえば、べてるの家に最初に行ったときの感激というか、解放感というの、この地続き感だったのでは。ぼくらが考えてるような確固としたへだたりなんかないんだ、ということ。

大木：むしろ我々は常識とか、社会生活を維持するために思考からカットしたり抑え込んでしまっている部分があるのに対して、彼らはそれが素直に全部出ているだけなんです。全く同じ人間であって、われわれがいかにか常識という狭い範囲に閉じ込められているのかということです。

大岩：逆に不自由だということですね。ぼくがべてるの家で発見した、そしてそこにいて感じたワクワクした感覚というのはなんだろうというと、きっとコミュニティの中にいる感覚なんです。実は彼らによって、ぼくらはコミュニティというものを失ってしまった自分というものを逆に突きつけられる。そしてコミュニティと何かという本質的なことを、非常にドラマチックにぼくらに突きつけているのではないか。

ここでのキーワードは「弱さ」という言葉ではないか、と思います。彼らの合言葉で言えば、「弱さを絆に」とか「弱さの情報公開」とかに明確にうち出されている。考えてみると、コミュニティと、コミュニティじゃない社会組織との本質的な違いはその「弱さ」ということにこそあるのではないのでしょうか。会社もそうですが、多くの近代的、現代的な社会組織は、むしろ強さを基準にして組織化し、弱さを切り捨てていく。競争原理というのがまさにこれですね。現代日本社会はまさに試験や資格によって組織化された競争原理の社会。そこでは人々をふるいにかけて、弱いものをふるい落としていくわけです。行き着いた先はヘッドハンティング。一番強いやつばかりを集めて組織をつくるという発想です。一方、伝統的な文化の中では、家族、親族、地域共同体といったコミュニティは、弱さを排除することなく、成りたつしくみです。いろんなやつがいて、でこぼこもあるし、困った人もいる。病気の人もいれば、みんな年若い

ていくし、小さいときは手がかかるし。こういうすべてのでこぼこを、むしろ弱さの方を基準にして、基本的にはだれも切り捨てずに、なんとかやっていく。これがコミュニティの定義ではないか。とすると、ぼくらはそこからずいぶん遠いところに来てしまったな、と思います。

第2部：GNHと豊かさと幸せの再考

大岩：次に、大木さんが今回の共同研究を始める前から、GNHという言葉に反応していたというその背景をおうかがいしたいと思います。どういう流れの中でGNHという言葉に注目されたのか、それがこの3年間の中にそれがどう展開したのか、そして今後の展開ですね。大木さんのコンテキストの中のGNHを教えてください。

大木：いくつかきっかけはあるんですが、ひとつは、自分のゼミの学生がうつ病で悩み、自殺未遂を起こすようになる。その背後をみてみたら母親との関係が非常にまずいです。母親との関係をたどってみると、その背後に夫婦関係がある。ぼくのところに相談に来る学生の抱える問題の背景に家庭があるのが見えてきた。なぜこんなことが起こったんだろうかと考えていたときに、ある衝撃的な事件に出くわしました。16歳の女の子が18歳の男の子と一緒にお互いの両親を殺して同棲しようと計画しました。やがて自分たちは捕まるだろうから、そこで一緒に死のうという事件です。「一緒に死ぬる相手だから愛しています」という締めくくりの詩を読んだときに、日本という国はなんておかしなところにきてしまったのかと思った。なぜこんなに不幸が広がっているんだろうか、と。10万人あたりの自殺率を見ると、アメリカみたいに緊張の高い国の倍、ヨーロッパの3倍多い。日本人が幸せになれない原因はなんだろうか、というのが自分の中にずっとありました。よく見たら、他人事ではなくて、自分のまわりの学生の中にけっこうそういう子がいる。ぼくのところに来た学生がうつ病で退学して、そのガールフレンドがまたうつ病でまた退学しました。なぜこんなふうになってしまったのかと考えていました。

それから、静岡に住む自分の母親の老後のケアを新幹線で20年近く通ってやりました。どうして老人がもっと大切に扱われないのか、というすごい憤りを感じていました。老人が幸せにならない社会なんて絶対に幸せな社会であるはずがない、と。

大岩：みんなそこに向かっていくわけですからね。

大木：人間が将来に不安を抱きながら生きていることの異常さということに、我々ももっと気がつく必要があります。なぜこんなふうになってしまったのかを考えてみると、価値がどこかで転換してしまったんです。大切なものが経済的な豊かさに置き換わってしまった。そこで切り捨てられてきたものはあまりに大きいと感じていました。それで現状とその原因をどうしても解明したくなって『関係性喪失の時代』を書きました。あの本を書いて3日後に体の異常が出るほど書くのがつらかったです。いのちを削るような思いで書きました。ある女の子はリストカットをしているところにお母さんに見つかり、「アンタ 病気？」と言われたんです。この女の子のブログを見ると「その夜はザクザクと切りました。本当にお母さんに言って欲しかった言葉がいっぱいいっぱいあったから・・・」と書いてあります。この言葉が忘れられないんです。どうして親子でもこんなにもこころが離れてしまったんだろうか、と。2003年くらいか

らずっとこの疑問が解けなかったんですね。若者を取り囲む大人社会も、みんなあまり幸せそうじゃない。なぜ日本という国はこんなに不幸せになってしまったのだろうか、というのがきっかけですね。

大岩：そこから、さきほどの周縁の人々に行きますよね。その背景は。

大木：ぼくが関係した人たちは偶然、世の中から周辺に追いやられた人たちだったんですね。老人であり、うつ病者であり、病人などです。うつ病の人は会社から出てこなくていいと言われる。学校にも行けない。そういう人たちがどうしているかという、家にももっているわけです。それから知的障がい、精神障がいの人たちは、養護学校が終わると車で次の施設に運ばれるから、世間の人には見られずに過ごすんですよ。ぼくもそういう人たちがこんなにもたくさん存在しているとは知らずに過ごしてきました。ところが、そういう NPO に入ってみると、いくら組織や施設ができて受け入れきれないくらいたくさんの子どもがいるんです。日本という社会は、障がいをもった人をこういうふうにして人の目から排除されたところに追いやってきたのではないかと思った。健康で元気で金のある人たちだけが日本を支えているのではなくて、いろんな人たちがいて日本なのに、どうしてこういう人たちが排除されているのだろうか、という疑問を抱くうちにそういう周縁の人びとのところにいきました。

大岩：そういう人たちの不幸せを見ることによって、幸せが何かというところが見えてくる、と。

大木：そういう人たちも幸せにならなくてはならないというのがむしろ強いんですね。

大岩：でも最初に言われたように、そういう人たちがしかし案外幸せである。老人ホームだって悲惨なところだとももわれているけど、その人たちなりの幸せがある、と。

大木：それを願っているんだということなんです。願っているんだけど、今の体制はそれを実現させてくれない。むしろ姥捨て山みたいな扱いをしているところに憤りを感じます。病人であろうが、年老いていようが、すべての人は幸せを願っているのにそういうふうにしていない社会はやはり異常ではないか、と思うんです。

大岩：この点ではぼくのアプローチとはかなり違っていたかもしれないですね。たとえばいちばん豊かだといわれるアメリカの社会の大金持ち、世界の中のほんのひとにぎりで膨大な富と権力を独占している人たちが、実はしかしとても不幸だ、という研究もありますよね。豊かなところにむしろ不幸が集中しているようなきらいさえある。

大木：それも同感です。なぜ彼らが不幸なのかというと、孤独なんだからだと思います。ぼくは、マザー・テレサがハーバード大学で行った演説のフィルムを見て涙がとまらなかった。表現は多少違うかもしれませんが、彼女はおよそこんな内容のことを言いました。「私はアメリカの貧しさを癒しにきました。でもその貧しさはパン一枚を求める貧しさではありません」。それは、愛に対する絶望的な飢え (desperate hunger for love) です、と言ったんです。この言葉のすごさ。あの繁栄の真っ只中にあるアメリカにおいて、人々がどれほど愛に飢えて孤独であるか、彼女はすべて見通していたんですね。その孤独を癒しにきたんだ、と演説したんです。

お金持ちになればなるほど、より多くのお金をほしがります。ぼくはいつも「のどがかわいた人が塩水を飲むようなものだ」という比喻を使うんです。今回の経済破綻ではリーマンブラザースでも、倒産した企業の人たちもそうだけど、彼らは何十億というお金をみんなもって

くわけです。あれだけのお金がありながら、なぜもっとお金を欲しがらるんだろうか。お金というのは塩水みたいなもので、のどの渴いた人に塩水をあげればよけいにのどが渴く。つまり別の面から見ると、不幸とかつらさにはこれが底だっているものがある。ところが欲望には上限がない。限界がないんです。だから無限に欲望がふくらんでいくので、満たされないとどんどん不幸になっていくというパラドックスがあるような気がします。

大岩：そのパラドックスは、反対から言うと、さきほどお聞きした森林療法研究会の活動の中で見えてきた周縁の人たちの中の幸せとか、あるいはべてるの家とか、でしょ。

大木：ぼくは悲観的なばかりではないんですよ。病人でも幸せな人はたくさんいる。なぜ彼らが幸せなのか、ということなんです。ぼくが思うのは、彼らはつながりを持っている限りは孤独ではない。非常に豪華な施設の特別室でケアを受けている金持ちの人でも孤独かもしれない。反対に、大部屋であっても、貧しい家であっても、だれかが声をかけてくれて、地域とつながっている人は孤独ではない。病院であろうがどこだろうが、やはり幸せ感がある。ぼくの母親は93歳で亡くなりました。ひとりぼっちで数十年住んでいましたが、近所の人たちが入れ替わり、立ち替わり様子を見に来るんです。だから彼女は孤独ではなかった。持っているものは粗末なものだったけど、いつもだれかが顔を出しては話をして帰っていく。孤独から救われてひとりで生きていけたんですね。やはりつながっていることの強さを感じます。

大岩：おもしろいですね。大木さんの場合一方に憤りがあるんだけど、そこから芽生えてくるものもある。そして逆にそれが世の中を変えていく力になるものがあるんじゃないか、という反転がある。

次にぼくの方の振り返りをしてみたいと思います。ぼくは環境運動をずっとやってきていて、いわゆる環境運動の全体に違和感がずっとあるわけです。そのひとつが棲み分けです。環境問題は環境問題、障がいには障がい、平和の問題は平和の問題というふうに分けられている。このことに居心地の悪さを感じてきた。そもそも環境問題はどのように引き起こされたのか。自分の生存の基盤を壊すなんてことは正気では考えられないですよ。でも実際に次の世代、その次の世代の基盤に大変な危機がきているのにいまだに、「それはそうだけど現実にはね・・・」などとのんきなことを言い続けている。この「現実」感覚っていったいなんなんだろう、と思います。

いろんな運動に携わっている人たちのことはもちろん尊敬していますが、どこかそういうせまい意味での「現実」にとらわれているのでは、という気がします。ぼく自身の活動を通して、なんでこんなことになるのかと考えてきたわけですが、結局、豊かさというところにどうしてもいかざるをえない。そこで、もう経済学を避けているわけにはいかない、ぼくなり勉強し直さないといけない。GNH研究会というのは、ぼくにとっての、「豊かさの学問としての経済学」というものをもう一度見直してみよう、ということだったと思います。そのときにGNHというコンセプトはとてもしゃれていて、誰にとってもいい入り口になる。まあ、最初にこれを言ったときのブータン国王は冗談半分だったとぼくは思っていて。そんな懸命に豊かになったのは何のため？ その結果、あなた方は本当に幸せになったの？ こういう問いがヒマラヤの山奥の小さな国からから発せられたのがおもしろくて。だから、ぼくはブータンそれ自体に

興味があったというわけではなくて、むしろこういう場所から、日本やアメリカのようなGDPの1、2を競うような国で生きている人間たちを揺さぶるような問いが発せられているのがおもしろかったです。

ましてや、ここは国際学部ですから、多くの人たちが開発や途上国の問題に関わりがある。ぼく自身も関わりがあるし、いろんな場所でいろんなことをやってきました。学生の多くも、特に優秀な学生であればあるほど、途上国に行って開発の援助をしてあげたいとか、学校を立ててあげたいとかと考える。それが気になり始めたんです。学校を建てたら、その学校を出た人たちは田舎を出て都会に行き、GDPのはしごを上っていくわけです。開発や援助という、国際学部がかなりのエネルギーを向けている先が非常に気になりはじめました。逆にこのGNHというコンセプトをテコにして、学生たちのいろんな関心や疑問にも答えられるのではないだろうか、と思ったわけです。

そして、この2年間、実際にぼくと大木さんが中心になって「豊かさを問い直す」という総合講座をやりました。この講座で学生に教えていて何か気がついたことはありますか。

大木:「豊かさの経済学」の延長で言うと、ぼくは開発経済学を学部から大学院までずっと勉強していました。国連の調査員として、インドネシアの経済開発のプランニングにも一時関わっていて、かなり犯罪的なこともやってきたんです。そのときの記憶でいうと、開発理論があったからこそ成功した経済の例はひとつもないんです。そのときにぼくが考えたのは、理論が間違っているのか、現実が間違っているのかといえ、現実が間違っているということはありません。理論がおかしいにきまっている。では、なぜ経済学が無力なのか、ということを考えて、そもそも経済学とはどんな学問なのかを考え始めて、社会科学としての経済学に向かいました。それで、社会科学方法論というのがぼくの修士論文のテーマとなりました。そこまでいったときに、根本的に経済学を問い直す作業に入りました。それで経済学を捨てて、もっと現実の社会を見てみようということで歴史学を選択しました。経済発展というのはトータルな社会変動論の一部なんです。つまり芸術、音楽とか家庭の問題とか、社会のあらゆるものが総体として動いている中の一部として経済変動も発展もあるにすぎない。短期的に見ると社会変動論だけ、長期的に見ると歴史学なんだと。短期で見る経済学はあまり意味がないと思いました。

大岩:この間いただいたミナンカバウの本を読み始めているんです。あそこにも内発的な歴史と、外発的な歴史、あるいは自動詞的とそれに対する他動詞的な発展というのが出てきますね。

大木:我々は文化がもっている力を過小評価してきたのではないかと感じます。世の中を動かしているのは政治とか経済がメインストリームであって、文化はその装飾品程度に考えてきたのではないかと。ところが、500年というような長期の時間軸の中でみると、社会を動かしているのは文化の力なんだと気がついて、ぼくは文化交渉史に転向したんです。

では文化とは何か。我々が物事を判断する最も基本的なものは真善美だと思います。何が真で何が偽で、何が善で何が悪か、何が美しく何が醜いか、という物事を判断する根源的な基準を持っていないと、いつも判断がぐらぐらしてしまう。そののこのところを自分なりにしっかりもっていれば、これから若者が生きていくときの指針になる。自分なりの真や美や善の基準を

持ってほしいですね。それが文化というものだと思います。その文化のあらわれを、たとえばファッションですが、ぼくたちがいろんな切り口から話すことによって、彼らに文化の大切さを認識してほしいと感じています。

大岩：「文明と文化」という昔からの難しい問題がありますが、豊かさという言葉は概念としては文化の中にもあると思うんです。では文明は何かというと、ぼくの考えでは、文化の変質したものの。なぜかそれが増殖し、歯止めを失っていくわけです。そのときにどの文化の中にもあるはずの「豊かさ」の概念が、変質して特異な存在になる。それぞれの文明に、「豊かさ」や「成長」や「拡大」というテーマが生まれ、それが人々の心をとらえるようになり、しまいにはそれがその時代時代にあったださまざまな制約と摩擦を起こし、文明自体の崩壊へつながっていったのではないかと。

大木：まさにそのとおりだと思います。文明、つまりシヴィライゼーションとはシヴィル、つまり都市文明のことを言うわけですね。都市文明というのは直接生産労働に携わらない人が周辺の人たちの余剰で生きていて、そこでは生産や技術に代表される物質文明、情報、支配のシステムなどが中心的な役割を持っている。これはギリシャ・ローマ文明を見てもわかるように、最初はポリスという都市国家みたいな小さなところから拡大していく。これが文明のひとつのダイナモドだと思います。そこではより広い領土、より多くの物質を獲得することが至上命令です。文化が元々もっている「豊かさ」はそれとは全く違う。

大岩：いよいよ文化という言葉が、ぼくの中で復活してきている、と感じるんです。今頃になって文化人類学やっていてよかったな、と。環境問題にずっと関わってきましたが、やはり環境問題というのは、文化問題なんだな、と。環境の危機とは要するに文化の貧困のこと。だったらその文化の貧しさをなんとかしないといけない、ということなのかな、と。

大木：最近、経済学をもう一度考えてみようと思って、アダム・スミス研究を読んでいます。文化としての経済学ということは今考えているんです。つまり経済学って「学」がついているけど本当は文化の一部にすぎない。文化ということ 키워ワードにして経済学を問い直してみると、経済学がどう変わるかを考えたいんです。そのためにはどうしてもアダム・スミスがどう考えていたかに行き着くわけです。国富論と道徳情操論はアダム・スミスの二本の柱ですが、彼はそんな単純に市場原理を言ったわけではないんですね。もっと情操も重要視した。彼は社会全体の変化の中で資本主義的市場原理を考えていた。ポリティカルエコノミーがエコノミクスになったときに、すべて社会全体のところが取り払われて、経済合理性・経済原理だけが突出してくるわけですね。だけど、経済行為なんていうのも人間のトータルな面からみたら文化の一部にすぎないと思直しています。文化としての政治学、文化としての経済学として見直す必要があるかと思っています。

大木：これがどこに入るか分からないけど、結論として日本人のことを考えてみたときに、幸福のハードルが高くなってしまったと思う。結局、以前はほんのちょっとしたことでも幸せを感じられたのに、どんどんハードルが高くなってしまって、ものすごく大きな幸せじゃないと逆に不幸を感じるようになった。これが日本の GNP が 6 倍になったのに、生活満足度がほとんどフラットな理由だと思う。どんどん幸せのハードルが高くなって、大幸せじゃないと逆に不幸を

感じてしまう。このことが日本人を不幸にしている。一方ブータンの人たちはほんのちょっとしたことで喜ぶ、感動したり、幸せを感じるんですね。

大岩：欲望の無限増殖が経済成長のエンジンですから、どんどんハードルが高くなるしかない。でも考えてみると老子とかブッダとか、ディオゲネスなんかが大昔から言っていたのもまさにこういうことです。欲望の無限増殖というものこそが不幸の源だよ、と、宗教の中でもずっと言われてきたわけですね。その人間がつまりきやすい一番大きな罠のようなものに、最近になって世界中の人々が大挙してはまった。その背景に何があったかということですが、ひとつはやはり化石燃料の存在が大きかったのかな、と思います。そういう物質的な基礎がないとこれだけ一挙に膨らまないとと思うんです。賢い人はいつでも必ずいるわけで、この辺で歯止めをかけようということになるはずなのに。現代のディオゲネスや現代の老子もブッダもいるはずなんですけど、そんなものにだれも耳をかさない。こんなに欲望の堰が切れてしまったのは、化石燃料の呪いかな、と。

大木：同感です。同じことを考えていますが、別の観点からも言えます。なぜ人間と人間との関係が断絶してしまったのだろうか、と考えるとやはり競争というものが根っこにある。資本主義の原理は競争の原理ですね。これは、現在実際には感じていない欲望をも掘り起こして、需要をつくり出していくシステム。そうでないと同じ規模の単純な循環経済になってしまう。そこでは必要なものだけをつくらせて循環する。しかし、資本主義では競争に勝つために、より安く、より多くつくるように駆り立てられるというシステムで、他人と競争することによって経済は活性化していくんだけど、常に新しい需要を掘り起こしていかなければならない。

大岩：常にニーズを創出しながら。

大木：そうなんです。そのためにどんどん欲望が膨らんでいく。

大岩：最近、世界の中でも日本が特にひどい。日本型の競争主義というのは、競争原理主義とも言うべきものじゃないか。イスラム原理主義のことを言ってもらえません。アメリカにすらあるようなある種の歯止めが日本ではきかない。ぼくはいちばん悪いのは試験制度だと思うんですが、どう思われますか。

大木：ぼくは物語を失ったことにあると思います。たとえばイギリスはゆりかごから墓場までという物語があって、それはいろんなところで破綻はしているけど、医療費は無料で安心して医療を受けられるし、社会保障制度も充実している。一方日本は不幸な物語しかもっていない。近代以降を考えると、明治維新の富国強兵ですよ、その後には大東亜共栄圏ですね。大東亜共栄圏という物語が破れたあと、次の大きな物語をつくれなかった。ぼくは、これは知識人の怠慢だと思っています。大きな物語がなぜ大切かという、日本という社会はこっちの方向に向かって進んで行こうという指針がなくて、ただただ戦後の貧困から抜け出そうという経済復興の物語しか描けなかった。

日本が戦後描いてきた物語を考えると、最初に出てきたのが所得倍増論、次に列島改造論。ほかに何かあるかというと、何もなし。物語がないことによって日本人は極端な拝金主義であり、物質的な豊かさだけを追うことになった気がします。

大岩：その点、アメリカは、アメリカン・ドリームでしょうか。日本はアメリカに多くの点で追随し

てきたけど、平均的な日本人にはアメリカン・ドリームなんてわからないでしょ？

大木：オバマ大統領は物語を提示したと思っています。アメリカの本当の強さは経済力でも軍事力でもなく、「The power of ideal」と言った。理念の力がアメリカの力の根源だ、ということです。これにはまいったと思いました。麻生首相からは間違っても出てこない。アメリカンドリームにしても、Ideal—理念—の重要性を実現できる社会なんだという漠然とした物語があるんですよ。

大岩：アメリカにはやはり建国の物語がいまでも日常の中に生きているんですね。

大木：これは戦後の日本人の知識人と称する連中の怠慢だとぼくは思っています。

大岩：まだ翻訳の域を出ていないですよ。

大木：ぼくが『関係性喪失の時代』の次のコンセプトとして考えたのが『奪い合う社会から分かち合う社会へ』です。結局、近代というものの原理を考えると「奪い合う」原理なんですね。奪い合うのは競争社会であり、奪い合うときに他との断絶が生じて、孤立と孤独が発生する。そして人間としてはいつも不安が耐えない。

ところがコミュニティの原理とは分かち合うことなんですよ。分かち合うということは、自分もっているものを他人に与えることによって、つながっていくこと。「つながる」ためには分かち合っていく必要がある。それがはじめて安心や安定をもたらしてくれる。ぼくが言う豊かさというのは、分かち合う原理がどれだけ生きているか、という問題です。どんなにお金を持っていても、一緒に泣いてくれたり、喜んでくれる人がいなければ何の意味もない。社会としても、個人としても「分かち合う」という原理を「奪い合う」原理に置き換えていくことが現代を乗り越える方法ではないかと。これは近代経済学の原則には反しているんですね。近代経済学は奪い合う原理です。人よりも良いものを安く作って、よりたくさん売って他の商品を排除していこうという原理ですから。

※本報告書は国際学部付属研究所共同研究「GNH—豊かさという概念を問い直す」の最終報告書である。